志村 恵「本のなかのふたごたち」④

ニコル・ランベール：『三つ子ちゃん』シリーズ

前回、ふたご間の競争意識について書くと予告したのですが、今回はユーモアについて触れたいと思います。子ども服のデザイナーでもあるニコル・ランベールの『三つ子ちゃん』シリーズを紹介します。今までの三回は、「ふたごとスーパーツインズ」と銘打っていたのにふたごしか取り上げませんでしたから、少し罪滅ぼしの意味も込めて『三つ子ちゃん』シリーズを紹介したいと思います。

このシリーズは、おしゃれなママと男の子二人、女の子一人の三つ子の日常のスナップ・ショットがセンスあるマンガで描かれている作品で、フランスでは大人気だそうです。さて、子ども一人でも大変なのに、三人一緒にイタズラをされたらどうなるでしょうか。想像しただけでも、僕などは身震いしてしまいます（みなさんにとってはいつものことかも知れませんが）。でも、子どものイタズラは創造的で、またとても人間的です（もちろん、イタズラを食らってしまった瞬間にはそう思えないことの方が多いです）。それから、日常の何気ないせりふやしぐさはどうでしょうか。他人の子どものものでも十分に可愛いのに、自分の子ども、それもふたごや三つ子やそれ以上だったら、それはそれは言葉で表現できないくらいでしょう。そうしたイタズラや可愛らしさを大変きれいな色使いと、優雅なラインで、ユーモアとウィット（フランスでは、エスプリと言うらしい！？）を添えて、まるで洒脱なお皿に盛られたオードブルか何かのように、「召し上がれ」と供してくれるのが『三つ子ちゃん』シリーズです。

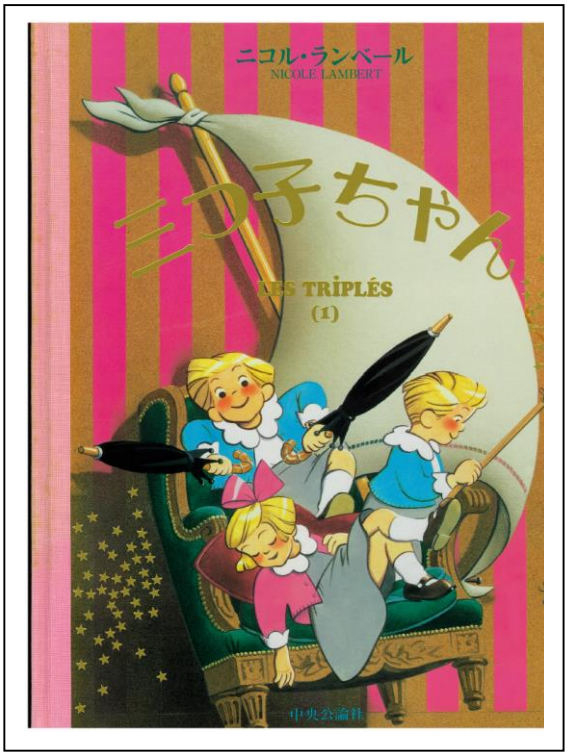
レストランのデザートに出てきた（子どもを一人で三人も連れてレストランに行くなんて、あなた考えられます？）バナナ・フランベ（バナナにお酒と砂糖をかけて火を付けたもの）に水をかけて、「火事を消した」と大いばりの三人の姿や、白黒テレビにペンキを塗ってカラーテレビにしてしまったり、おばあさんの白髪頭を綿菓子と間違ってつまんでしまったり、クリスマスツリーをママの宝石やアクセサリーで飾ったり、壁紙にイタズラ書きをしたりの大活躍には、思わず微笑みがこぼれてしまいます。そして、その都度その都度、ママは嘆いたり、おこったりもしますが、それはちっとも深刻には描かれてはいません。ユーモアのオブラートで包み込まれ、きれいな絵とすてきな文章で表現されると、なんだか別の世界の出来事のように見えるのです。

ドイツ・ミュンヘンに、精神分析医でイデオロギーやファンダメンタリズムについての著書で有名なヴェルナー・フートという先生がいらっしゃいます。フート先生には、昔、ミュンヘンの奢侈な住宅街にある先生の診察室でお会いしました。先生は、その包み込むような柔らかさと、初対面とは思わせないオープンな話し方によって、奥様ともども、僕に近年にない大きな意味のある出会いをもたらして下さいましたが、実は、フート先生もふたごの息子さんたちの父親だったのです。そのときはあまりの偶然にすっかり驚いてしまいました。さて、そのフート先生がある本の中で、ユーモアとは、「現実の中に存在する緊張関係を、まさにこの現実を究極的に信頼することで堪え忍び、それと同時に調停することができる円熟の表現である」と書いておられます。つまり、ユーモアが持っている力は、その問題を生じさせている現実をも信頼して、その問題から逃げずに、問題の解決に導いてくれるような、豊かな力だと言うのです。何とすばらしいことでしょう。そこには、ニヒルな冷笑や馬鹿にするような嘲笑とは違った人間信頼に基づく生命の根元的力があるように思われます。そういった意味で、ユーモアのある生活は、現実的には極めて厳しい生活環境にあるふたごやスーパーツインズとその育児者（特にお母さん）にとって、慰めと勇気を与えてくれるものだと思います。「こんなに忙しいのに、こんなにボロボロなのに、何がユーモアだ」と怒りたい方も多いと思いますが、だまされたと思って、笑いとユーモアを

意識してみて下さい。きっと何かが変わります。堅い話で申し訳ありませんが、実は、ユーモアという装置は、自己省察と自己の相対化なしには生まれて来ないものなのです。また、文学の世界でも、特に19 世紀中期のドイツ文学などでは、ユーモアという仕組みは、自己を一段高い境地へと運びあげる原理として大きな役割を果たしてきたものなのです。前回、『お風呂大好き』のところで、自由と社会的規制の関係で、「こうした余裕というか、相対化は、特に、一対一の関係であるふたごの場合は重要だと思います」と書きましたが、ユーモアこそ、そうした自由なあり方を作り出す大きな原動力になるはずです。

最後に付け加えますが、ユーモアということにこだわらなくても、『三つ子ちゃん』シリーズは、その柔らかなで多彩な色あいとファッション性において十分に僕たちを楽しませてくれますし、なごませてくれます。

残念ながら『三つ子ちゃん』は少し値が張るので（初版本で一冊３４００円）、図書館などで借りて下さい。



ニコル・ランベール：『三つ子ちゃん』書影

ニコル・ランベール：『三つ子ちゃん』１ー４、中央公論社、１９９４ー９６年。

『ツインズ』28 号（ビネバル出版）から転載